

CONTENTS

文化の交差点 青木 保・文化庁長官鼎談 第22回 ゲスト 猪木武徳さん／佐伯啓思さん	
カフェ・アオキ in 関西 文化と教養を！	4
長官コラム 青木保のカフェ・アオキ	8

特集 文化芸術創造都市

施策紹介

文化芸術創造都市の推進	長官官房政策課・14
シンポジウムレポート	

創造性をはぐくむ都市へ	15
有識者提言	

世界的な文化芸術創造都市の潮流	佐々木雅幸・20
事例紹介	

「連携と差別化」英国のクリエイティブシティ	ジョセフィン・バーンズ、アレックス・ホンフレー・22
-----------------------	----------------------------

「アジア文化中心都市・光州」韓国の取組	小川匡史・24
---------------------	---------

「楽都」と「劇都」～「街」を舞台とした仙台市の取組	梅内 淳・26
---------------------------	---------

「環境とアートのまち」直島町の取組	浜中 満・27
-------------------	---------

特別寄稿

子どもの心の中に内視鏡を	杉良太郎・28
--------------	---------

連載

鑑 文化芸術へのいざない 2	文化交流使の活動報告 54
2つのアカデミー賞（佐伯知紀）	30
いざいミュージアム 美術館・博物館事業レポート 86	暮は日本で育てられた文化（囲碁棋士・小林千寿）
徳川美術館	32
どんなものかな著作権 1	36
著作権制度の概要	
こどもの文化体験 26	文化庁ニュース
浮世絵木版画「彫り」「摺り」技術体験教室	国境を越えて伝わる舞台芸術作品（丸岡ひろみ）
（浮世絵木版画彫摺技術保存協会）	33
匠に託された技—伝統を知る（本田光子）	38
祭り歳時記 伝承を支える人々 37	「日本文化への理解と関心を高めるための文化発信の取組について」報告
常陸大津のお船祭（茨城県北茨城市）	34
	40

今月の表紙

鏡川上流の菜の花（高知市）
撮影：岩崎 明

イベント案内● 41

新国立劇場スポットライト● 45

6月の国立劇場● 46

芸術文化振興基金ニュース● 47

シンポジウムレポート

創造性をはぐくむ都市へ

平成二十二年一月三〇日（金）、平成二〇年度文化庁長官表彰（文化芸術創造都市部門）表彰式及び記念シンポジウムが国立新美術館において開催されました。「創造性をはぐくむ都市へ」と題したシンポジウムでは、青木保文化庁長官がコーディネーターを務め、建築家の安藤忠雄氏など五名のパネリストを迎えて、文化芸術の創造性に着目した都市のあり方やその形成について議論が行われました。

本シンポジウムは計二時間四〇分にはたり、さまざまな観点から活発な議論が繰り広げられました。今回は紙面の都合により、このうちの一部を抜粋し、再構成してご紹介します。

青木 文化の持つさまざまな力を都市の発展に役立て、都市そのものが魅力的で、しかも

市民も快適に住める、またそこにあるさまざまな産業が活性化するという、「創造都市」をつくらうという動きが、二一世紀の新しい都市づくりの方向性になりつつある。

日本の都市は、明治に至るまでの江戸時代の町並みや文化に対して否定的であって、それを壊して新しいものをつくるという形で展開されてきたのではない。文化というものがある都市にどうやって作用するかについて考えが至らないうちに、近代日本国家の発展という中で都市が膨張してきたように思う。

どういった形で文化を取り上げ、どう都市の文化を還元させるか。それが都市の魅力、都市のアイデンティティとなる。今後我々がどうやって都市をつくっていくかということについて、文化の面からいろいろと論じていきたい。

○パネリスト

安藤 忠雄（建築家、東京大学名誉教授）

佐々木雅幸（大阪市立大学教授・都市研究プラザ所長）

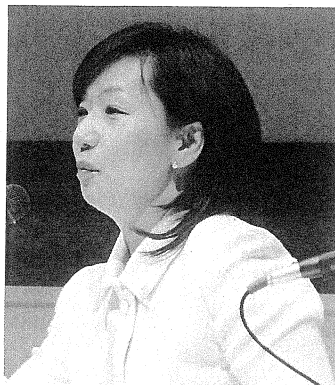
蓮池奈緒子（NPO法人アートネットワーク・ジャパン代表）

平田オリザ（劇作家・演出家、大阪大学大学院教授）

宮島 達男（現代美術家、東北芸術工科大学副学長）

○コーディネーター

青木 保（文化人類学者、文化庁長官）



蓮池奈緒子氏



佐々木雅幸氏



安藤忠雄氏

「文化芸術創造都市」とは

佐々木 ヨーロッパをはじめアジアでも、国がリードしていく中央集権的な時代から、地方自治体（都市）が経済や文化やあるいは人々の生活にとって一番大事な仕事を引き受ける時代になってきた。都市のありようが問われるようになり、改めて二〇世紀的な製造業を中心とした時代から二一世紀的な知識・情報経済あるいは成熟社会への転換を考えたとき、そこにおける人々の生きがいあるいは能力を高めるものとして、文化が幅広く理解されるようになってきた。これが創造都市というもののバックグラウンドである。

安藤 生きることの価値や生きる楽しみを見

出すのが文化と思う。現在、世界的な不況で日本も経済が悪くなって人々の気持ちを暗くしているが、自分の心の中にエネルギーさえ持ち合わせていれば十分楽しみはある。これが文化というものだ。

子どもたちが、これからただ物質的に充足して生きるだけでいいのか。都市は、芸術を受けとめたり、人間の楽しみを受けとめたり、そして心から生きていてよかったということを実感したりする、そういう場所だとするならば、もともとつと国も企業もやるべきことがあると思う。

建築物という箱も文化だけれど、箱ができただけでまちに文化ができるわけではなく、その使い方が大事。日本の経済大国としての顔が怪しくなってきた今、大切なのは好奇心。今まで男性は仕事のことばかり考えてきたが、男性も、女性に負けず好奇心旺盛に、もつと積極的にまちの文化的な営みに参加していくべきだと思う。

平田 創造都市とはお題目ではなく、フランスのように公的な資金を投下して作品を創り、それが国内外のほかの劇場を回って資金を回収していくようなシステムを有することが大事だと思う。文化予算のたれ流しではなく、教育や福祉など市民にも直接的な還元を

するものや産業に結びつくようなものが位置づけられていることが大事。ニューカマーの人やホームレスの人、失業者がアートを通じて社会参加する、あるいは生きる活力を得る、そういった役割も劇場は果たす。

日本でも、アーティストに愛情をもって接してもらいたいと思う。アーティストがレベルの高い作品をつくって、それが地域を超えて広がっていくときに初めてアートが地域の誇りになると思う。同時に、これからの日本のアーティストは、アーティストの役割の公共性ということを考えて行動しなければならぬ。

「文化芸術創造都市」とのかかわり

蓮池 アートネットワーク・ジャパンというNPOの代表をしている。現在の拠点は「にしすがも創造舎」というところで、これは閉校になった学校をアートセンターやチルドレンズミュージアム（子どもたちが集って何かアート活動をできるような場所）にしようと、豊島区とNPOが二〇〇四年から協働で始めた事業である。まず、何もない小さな教室を、けいこ場、創造の場として若いアーティストに開放した。次に、体育館を劇場として使用できるよう改装し、演劇やダンスを届ける発信の場として整備した。

宮島 私はこれまで現代アートを創り、展覧会で世界中を回ってきたが、現在は東北芸術工科大学で教育に携わっている。東北芸術工科大学は「芸術によって、いかに平和で豊かな社会をつくるのが可能か」を理念として標榜している。現在、農村地域の廃校で展覧会をしたり、ひなびた温泉街でアート作品をプロジェクト化することにより温泉街に活気を取り戻したり、といった活動を学生達と一緒にに行っている。

地域の人材と箱をつなぐ

宮島 創造的な都市というのは、建物つまり箱ではなくて、結局は人だと感じている。つまり、おもしろい発想をもつ人がいる、創造性がある豊かな人材群がいる、そういう都市こそ魅力のある創造都市ではないかと考える。

日本には箱は十分あると思う。ただ、地域にある才能と箱とがうまくつながっていない。芸術大学では、1%の天才が輩出されるが、残りの99%は天才の陰に隠れて出身地に帰る。ざっと数えただけでも日本全国に三〇万人から五〇万人、つまりどの市町村にも芸術教育を受けた芸術家らしき人がいることになる。彼らと箱とをどうつなげるかというのがこれからの課題。その際、アーティスト

だけではなく、双方をつなげる役割、つまり蓮池さんのような、プロデュースとかキュレーターとかディレクターといった、中継ぎをする創造的な人材も必要になる。

佐々木 伝統的な文化や暮らしをそのまま保存しているだけでなく、先ほどから話に出てくるようなプロデュースあるいはアートマネジャーにより、そこに新しいアイデアが持ち込まれたり、あるいは現代アートによりちよつとしたカオスが作り出されたりする。そういう、従来日本が下手だったソフトとハードをうまく組み合わせて「創造の場」を運営するような、クリエイティブプロデュースを大量に養成していくことにより、住民の生活の身近なところに文化ができてきて、住民の創造性をはぐくむことができるようになる。

蓮池 私たちがやっている仕事若い世代のモデルケースとなって、こういう仕事をしてみたいという子どもたちが増え、アーティストと社会をつなぐような仕事、仕事としても、つまり生活の糧としても成り立ち、社会的地位が築かれるとよいと思う。私たちはアートNPOとして、新しい公共を担う立場にある。若い世代がそういう仕事に就きたいと思う、そして全国的にそういう人たちが活



青木 保長氏

場を誘致したところで、一ドルが七〇円とか六〇円になったらみんな逃げていくのだから、安藤さんがおっしゃっているように、自分たちの地域でソフトを生み出して、そしてそれを楽しむような、持続可能な都市づくり変えていかない限り、地方再生はないと思う。

またそのためには、やはりその地域に有能



宮島達男氏

躍できる地盤ができること、さらにそこから世界に飛び立つような若者が出てくることを楽しみにしている。

創造教育と大学

平田 作家・演出家として、作品を創るかわら、大阪大学で教鞭をとっている。日本の代表的な国立大学の多くには、頭を鍛える施設や体を鍛える施設はあるが、劇場も美術館も音楽ホールもない。心を鍛え、心を豊かにする施設がない。教育というのは心と体と頭の三つを育てることであるにもかかわらず、心の教育が欠けている。日本のまちづくりも同じだと思う。頭と体については考えているけれども、心の部分については欠如しているのではない。



平田オリザ氏

宮島 我々が学生に言っているのは、創造力は企業に入っても必ず役に立つということ。今経済危機になって、企業は突破力や創造性を求めている。今までのやり方では企業も回らないし、経済的發展も難しい。そのとき、創造的な教育により培われた、苦境を突破する能力が評価される。

例えば八百屋さんだって農業だって、創造性がなかったらやっぱり成功しない。接客だってそう。相手の気持ちになって痛みがわかるイマジネーションとそれから苦境に陥ったときの突破力、創造性、これらを涵養していくのが芸術教育であると位置づけている。

自治体経営の戦略としての文化政策

平田 おもしろい人たちが住んでくれなければ都市はおもしろくならない。どんなにおもしろい建物を建てても、それだけではだめだと思う。今、終身雇用がどんどん崩れていており、Uターン、Iターン、それから親との距離が一時間圏内といったJターンが増えると思う。そのときに何を基準に住む場所を選ぶかという、子どもの教育と文化政策ではないか。

一般企業はメセナ活動により、企業イメージを高めて、いい人材を集めることにつながっている。自治体だって、これからは生き残り

なプロデューサーを育てていかねばならず、大学の役割も非常に大きい。

今後の展望

青木 皆さんの話を聞いていて、やはり創造都市といっても基本的には人の問題であり、教育の問題が非常に大きいと感じた。日本の公教育の体系に、文化教育とか創造教育がきちんと位置づけられていないということは、大きな問題だと思う。最後に一言、今後の展望についてご意見などいただきたい。

佐々木 文化庁長官表彰を受けた都市が中心になって、創造都市のネットワークをつくり、優れた経験や問題点克服について情報共有しながら前へ進んでいってほしい。その場合、行政の相互のネットワークも必要だが、市民あるいはアートNPOの人たちの相互のネットワーク、それから大学も大きな役割を果たすので、それぞれの大学とか教育機関のネットワーク、こういったものを重層的につくっていくと、日本の文化芸術も変わっていくと思う。

安藤 二〇年前、ベネッセの福武会長が瀬戸内海に浮かぶ直島というところでまちづくりをした、直島を自然にいい芸術いっぱい

をかけた戦いが始まるわけだから、いい人に集まってもらおうと思ったら文化的イメージを高めていく以外ない。文化行政は、あったほうがいいという類のものではなく、自治体の生命線になっていく。

青木 これからの都市においては、産業的側面にどうやって付加価値を高めていくかが重要。これまで企業は、敷地が安く購入できて大きな工場が建てられるといった理由で、地方あるいはアジアに進出することが多かったが、これからはそれとは違った産業の発展の仕方が日本にはできるのではないかと、あるいは求められているのではないかと。それは、文化と非常に関係が深いと思う。

平田 いくら公共事業で資本投下しても、今は消費社会なので、みんな東京資本のコンビニとかショッピングセンターで買い物をしてしまい、東京にお金吸い上げられてしまっている。お金を投資するだけではなくて、地域でそのお金が回らなければ、地域経済は活性化しない。よく地産地消と言われるが、こんなにエンゲル係数の低い国で食品だけを地産地消していてもお金は回らない。

ソフトを地産地消することが大事。ソフトを生み出して、それを地域間でちゃんと相互に消費していくシステムをつくる。いくら工

の島にしたいと言いつつ出た。直島は、岡山県の宇野港からフェリーで二〇分ほどかかる不便な場所、私も無理だと思ったし、島の人々も関心なかった。しかし、一人の人間の思いは、植林、文化施設の建設、古民家を修復して現代アートを展示する「家プロジェクト」へと展開していった。おじいちゃん、おばあちゃんも、初めは恐る恐るだったが、現代アートに触れ、現代アートを来客に見る若い人々に触れ、元気になった。そして、民宿やうどん屋、コーヒースタイルと言った店を開き、島の外の人々と交流し、生きることを楽しむ欲がどんどん出てきた。

生きることに欲のない人たちができあがったまちや国はつまらない。芸術を、そして生活を楽しむことで、まちや国が元気になる。

青木 本日のシンポジウムは、我々としては第一回目の試み。創造性とか創造都市という言葉も、これまであまり日常的に使われていなかったもので、こうやって少しずつ広まっていき、人々がそういう言葉で物考え出すことが大事。

今回のシンポジウムでさまざまな課題が浮き彫りになったので、文化庁としても今後また一層創造的な政策をやっていきたいと思う。また逐次こういう公開の形で、皆様と一緒に考える機会が持てばうれしい。

◆長官対談◆
〔文化の交差点〕 青木保文化庁長官対談
辻井 喬 詩人・作家
〔長官コラム 青木保のカフェ・アオキ〕

◆特集◆

国際著作権をめぐる動向

〔施策紹介〕

著作権をめぐる国際ルール形成の最近の動向

〔事例紹介〕
国際的な知的保護に向けた民間の取組
海外におけるエンフォースメント確保を
目指して
インターネット時代の国際私法の在り方
とは

〔施策紹介〕
途上国における著作権保護を考える

◆連載◆
〔鑑〕文化芸術へのいざない
工芸の材質を楽しむ
特別展「憧憬の中国仏教」
〔文化人の気遣い〕
周防正行・映画監督
「いきいきミュージアム 美術館 博物館 博物館事業レポート」
千葉県立中央博物館
〔子どもの文化体験〕
学校への芸術家派遣事業を終えて
〔日本の伝統美と技を守る人々〕
中川 衛・彫金
〔文化文庫の活動報告〕
福田千栄子・地歌寄曲演奏家
〔伝建地を見守る人々 伝建地時記〕
東山ひがし・茶屋町を舞台とした
新たな夏の風物詩（金沢市）

◆文化庁ニュース◆
平成二〇年度（第五九回）芸術選奨

など

編集後記

平成一九年四月に着任した青木保文化庁長官のイニシアティブにより、文化芸術創造都市に取り組み自治体への表彰制度が創設されました。青木長官が文化芸術創造都市の取組において最も重要だと考えていることは、住民ひとりひとりの生活をいかにクリエイティブにできるか、活性化できるか、ということです。

ができましたが、参照・特集二四ページ掲載、氏も最も重要なのは、住民自らが参加すること、そしてクリエイティブな人が住みやすいまちづくりへ取り組むこと、おられました。

今後も、文化芸術創造都市の取組を通じて、住民ひとりひとりの生活が楽しく可能性に満ちたものになることを、新たな文化が創造されることを期待したいと思います。（政調）

美術館・博物館チケットプレゼント

今月号の展覧会等へのチケットプレゼントは、
A 東京国立近代美術館工芸館
「ヨーロッパの工芸とデザイン」
2組（ペア）

B 国立西洋美術館
「ル・コルビュジエと国立西洋美術館」
2組（ペア）

C 国立新美術館「野村仁」
2組（ペア）

です。ご希望の方はアンケートハガキのチケット応募欄に必要事項をご記入のうえ、5月25日（月）までにご投函ください（当日消印有効）。

*チケット発送をもって当選発表にかえさせていただきます。

文化庁では、ホームページで、文化庁に関する情報を幅広く提供しています。ご意見、文化庁月報の感想などを、ホームページのご意見欄へお寄せください。

●ホームページアドレス●

<http://www.bunka.go.jp>

文化庁月報 5月号（通巻488）

平成21年5月25日印刷・発行

編集——文化庁

〒100-8959 東京都千代田区霞が関3-2-2

発行——株式会社 きょうせい

本社 〒104-0061 東京都中央区銀座7-4-12
本部 〒136-8575 東京都江東区新木場1-18-11
電話 編集 03-6892-6536
販売 03-6892-6666
フリーコール 0120-953-431
URL : <http://www.gyosei.co.jp>

印刷所——ぎょうせいデジタル株式会社

●本誌の掲載のうち、意見にわたる部分については、筆者個人の見解であることをお断りいたします。

定価540円 〔本体514円〕送料76円

年間購読料6,480円

本誌のご購読のお申し込みは、直接弊社の本・支社、あるいは最寄りの書店へお申し込みください。

広告の問い合わせ・申し込み先
（株）ぎょうせい営業部首都圏課（広告）
電話03（6892）6588（ダイヤルイン）
2009 Printed in Japan ISSN 0916-9849

本誌は本文に再生紙・大豆油インキを使用しております。